

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10) 平成27年度:29.

下肢閉塞性動脈硬化症の患者が考える転倒予防行動

渡邊 なつ美, 小泉 歩子, 成田 詩織

下肢閉塞性動脈硬化症の患者が考える転倒予防行動

キーワード：転倒予防、下肢閉塞性動脈硬化症、バイパス術、入院患者

○渡邊なつ美・小泉歩子・成田詩織

旭川医科大学病院 9階東ナースステーション、雄武町国民健康保険病院

I. 目的：下肢閉塞性動脈硬化症(以下下肢ASO)のバイパス術後の患者が自分自身の歩行をどのように捉え、転倒予防行動に繋げているかを明らかにする。

II. 方法：対象は術前・術後に歩行しており、意思疎通に障害がなく、潰瘍形成がない患者3名。インタビューガイドを作成し手術後2週間を目途に半構成的面接を実施した。逐語録をコード化し、患者自身の思いを抽出しカテゴリー化した。

III. 倫理的配慮：研究への協力は任意であり同意の撤回が可能であること、録音データは研究者以外が使用しないことを説明し同意を得た。本研究は所属する施設の倫理委員会で承認を受けた。

IV. 結果：分析の結果、サブカテゴリー12、カテゴリー6が抽出された。以下《》はサブカテゴリー、【】はカテゴリーとする。《歩行時に痛みがあった》、《歩行時にふらつきがあった》、《歩行時には不安があった》から【歩行時の疼痛、不安定感や不安がある】、《転倒への恐怖がある》、《転倒しやすい状況を認識している》から【転倒の危険の認識がある】、《歩行時に支えになるものを使用する》、《同室者に声を掛け合う》、《緊張感を持って行動する》、《危険や症状を感じたときの転倒予防行動がある》から【転倒に対する予防行動をとっている】、《徐々に歩行に違和感がなくなる》から【歩行に対する違和感が軽減する】、《転倒の危険を感じなくなる》から【徐々に転倒の危険の認識がなくなる】、《見守りが無くても一人で安全に歩行できると考えている》から【看護師に歩行を見てもらうことの必要性を感じていない】が構成された。

V. 考察：下肢ASOバイパス術後の患者は【歩行時の疼痛、不安定感や不安】を抱き、【転倒の危険の認識】をもち、手すりに掴まりながら歩行する等【転倒に対する予防行動】をとっていた。窪田らは「転倒するかもしれないという不安から、転ばないようにするためにはどうすれば自分にとって安全なのかを考え自ら注意する行動をおこしている」¹⁾と述べて

いる。そのため、歩行時の不安定感を感じた患者は安全な移動手段を考え、転倒予防行動をとっている。

下肢ASOバイパス術後に日数が経過すると下肢の自覚症状が軽減し、【歩行に対する違和感が軽減する】と自覚していた。また、【徐々に転倒の危険の認識がなくなる】こと、【看護師に歩行を見てもらうことの必要性を感じていない】患者もいた。窪田らは「手術後に症状が軽減した患者は手術前にできなかったことができるようになり、大丈夫という思いを持ちやすい。しかし、すぐに運動機能障害や筋力が回復するとは限らないため、転倒の危険性が高いことを事前に予測して伝えていくことが重要である」²⁾と述べている。そのため、下肢ASOバイパス術後の患者は症状が軽減すると歩行に対する違和感が軽減し、徐々に転倒の危険の認識がなくなると考えられる。また、安静制限による筋力の低下もあり転倒のリスクが高いが、ADLが向上している過程で自信が付き、一人で歩行したいという意欲が高まると考えられる。そのため、患者が自分自身の歩行をどのように捉えて転倒予防行動をとっているかを確認する必要がある。また、看護師からみた歩行状態と転倒の危険を患者と共有し、主観的な歩行状態と客観的な歩行状態を統合することが必要と考える。

VI. 結論

1. 歩行の不安定感を自覚している下肢ASOバイパス術後患者は転倒の危険を認識し、転倒予防行動を実施している。
2. 自覚症状や歩行に対する違和感がなくなると転倒の危険の認識がなくなり、1人で歩行したいという意欲が高まる。
3. 患者の主観的な転倒予防行動を看護師が理解し、客観的にみた歩行状態を患者にフィードバックして患者とともに転倒予防行動を検討する。

VII. 引用文献

- 1). 2) 窪田真澄・岩村奈美・田中舞・他：転倒に対する患者の思い-整形外科手術を受けた患者からの共通要因-, 第39回日本看護学会論文集(老年看護), p138-140(2008)